

朝鮮半島赤化の脅威

— 北朝鮮侵略告発状 —

常務理事 富田 稔

はじめに

中国大陸から日本列島の脇腹に突き出ている朝鮮半島は、古来からわが国の安全保障に大きく係わってきている。その朝鮮半島で、今、何が起きているのであろうか。

この原稿を書いている平成28年11月末には、朴槿恵（パク・クネ）大統領の支持率は4%を切り、大統領を批判する大規模なデモが行われ、大統領弾劾に向けての動きが加速し、大統領自身が退任を表明するに至った。

そのような混乱の始まりは、朴槿恵大統領と親友の崔順実（チェ・スンシル）被告が絡む一連の疑惑のようであったが、それは単なる切っ掛けにしかすぎないであろう。

韓国内における最高権力者を巡る騒動は、今に始まったことではない。

1948年に李承晩を大統領の下で大韓民国が独立して以来、18代11人の大統領が就任したが、いずれも大統領末期には、悲惨なあるいは異常な状態であった。

【歴代韓国大統領の政権末期前後の状況（括弧内は、代、大統領就任期間）】

李承晩（第1、2、3代連続、1948・7～1960・4）

不正選挙を糾弾されハワイに亡命。五年後にハワイの養老施設で死亡。

尹潽善（第4代、1960・8～1962・3）

1961年5月のクーデター（五・一八クーデター）で大統領としての実権を奪われ、退任。その後、憲法秩序破毀の非合法活動で非難・立件され三年間の懲役の実刑判決。

朴正熙（第5、6、7、8、9代連続、1963・12～1979・10）

…在任中に、側近の金載圭 KCIA 部長によって暗殺。

崔圭夏（第10代期、1979・12～1980・8）

…学生デモ拡大、肅軍クーデターを実行。結局収まらず、後に光州事件に発展。

全斗煥・盧泰愚らによる五・一七クーデターによって、軍部に政権を掌握され、辞任。

全斗煥 (第11～12代、1980・9～1988・2)

…一九八七年以降、反政府運動が活発化し政権委譲。退任後、不正蓄財など追求され私財を国家献納し隠遁。その後も追求止まらず光州事件における反乱首謀罪で死刑判決。後に、減刑、恩赦。

盧泰愚 (第13代、1988・2～1993・2)

…退任後に収賄容疑で逮捕。光州事件の内乱罪等で懲役一七年の判決。後に恩赦。

金泳三 (第14代、1993・2～1998・2)

…在任中に経済危機に陥り IMF の介入を招き国民から非難されたが任期は全う。
次男は利権介入による斡旋収賄と脱税で逮捕。

金大中 (第15代、1998・2～2003・2)

…息子三人を含む親族が金がらみの不正事件発覚、謝罪。2002年に南北首脳会談等が評価されノーベル平和賞を受賞したが、首脳会談成立の裏には北朝鮮への不正送金疑惑あり。

盧武鉉 (第16代、2003・2～2008・2)

…在任一年目に弾劾訴追を受け約二ヶ月間職務停止、訴追棄却により復帰。末期には地方選挙での与党敗北などもありレームダック化。
退任後、側近・親族が贈収賄等で逮捕、不正献金問題の疑惑が本人にも及び自殺。

李明博 (第17代、2008・2～2013・2)

…実兄が斡旋収賄などにより逮捕、本人にも土地不正購入疑惑などが生じレームダック化する中、竹島上陸、天皇謝罪要求。退任と同時に逮捕は免れないとの噂もあったが、任期満了。

朴槿恵 (第18代、2013・2～?)

…友人崔順実の国政介入問題により、支持率が急落。この問題に対して数度の国民向け談話を発表し、悔恨の念を表明。11月29日の談話で大統領任期の短縮を含む自らの進退をすべて国会に委ねる意向を表明。

政権末期におけるレームダック化は、多かれ少なかれどの国、どの時代でもあることであろう。

しかし、韓国の場合は異常である。

その背景には、歴史的に中国、日本の強い影響下に置かれてきた朝鮮半島の人々の被害者意識と

強い権力指向、それに輪を掛けて憲法で保障された大統領の強力な権限がある。しかしながら、今、韓国で起こっていることはそれだけでは読み解けない。大東亜戦争後に朝鮮半島が南北に分断されて以降の韓国政治には常に北朝鮮との関係、その裏で北の謀略の陰がうごめいていることを思わざるを得ない。先日、在日韓国人の某氏からある本を紹介された。『北朝鮮侵略告発状 一五・一八は北朝鮮の侵略である—光州暴動現場写真の中の400余の顔、皆、平城にいた—』との韓国語の本である。

某氏は、我々のためにその本の要点を日本語に訳してくれた上、赤化の脅威に晒されている韓国の実態を話された。

某氏からいただいた本（日本語訳）の内容は、我々の想像を超えた間接侵略の様相であり、韓国で起こっていることを理解するためのみならず、わが国にも起こりうる間接侵略の実態を見る上で欠かせないものであろう。その内容の全てを紹介することは、少ない誌面ではできないことである。本誌では、この本の舞台となった「五・一八光州暴動」についての概説した上で、この本の性格をしてもらうために、この本に書かれている「著者について」と「五・十八歴史の真実を明らかにする宣言文」、その宣言文の要点となっている「裁判での事実誤認」についての記述の骨子を紹介する。

【五・十八光州暴動】

1979年10月に朴正熙大統領が暗殺された後、首相であった崔圭夏国務総理が大統領権限代行を経て第四代大統領となり民主化の動きが起ったが、軍内部の新旧勢力の対立が表面化した粛軍クーデターにより全斗煥を中心とした軍部に実権を握られた。

その後も民主化の波は収まらず、実権を握った軍部が1980年5月17日に全国に戒厳令を布告し金大中等を逮捕監禁した。翌5月18日、金大中の出身地である全羅南道の道庁所在地である光州市で大学を封鎖した陸軍部隊と学生が衝突した。軍・警察による鎮圧の動きに呼応するように、デモが市全域に拡大し、バスやタクシーを倒してバリケードを築き、角材や鉄パイプ、火炎瓶などで応戦し、郷土予備軍の武器庫を襲い武装化するに至った。鎮圧部隊

は一時市外に後退して、光州市を封鎖した。5月26日に、暴徒と化した市民が占拠した全羅南道庁に対する鎮圧命令が下り、27日には、武器庫襲撃の首謀者らが射殺され、暴動は鎮圧された。直後の5月31日の戒厳司令部発表によると、死亡者数は170人（民間人144人・軍人22人・警察官4人、負傷者数は380名であった。

これが、光州事件の概要であるが、問題は韓国における民主化運動とそれに対する弾圧と見える光州暴動事件は、煽動した者達が北朝鮮の工作員であったということである。その根拠を明らかにして告発状として出版されたものが、『北朝鮮侵略告発状 一五・一八は北朝鮮の侵略である—光州暴動現場写真の中の400余の顔、皆、平城にいた—』である。この本の前半部分は、北朝鮮の謀略の実態と韓国政治に浸透している事実の調査結果であり、後半はグラビア写真集になっている。写真集には、著者達が集めた光州暴動の現場を写した写真、そこに写っている人達と北朝鮮の高官等とが同一人物である証拠の写真が並んでいる。

以下、某氏からいただいた日本語への仮訳からの抜粋又は要約である。

【著者について】

この本の著者は、池萬元という元陸軍大佐である。彼は、1966年士官学校を卒業後、砲兵将校としてベトナム戦争に参加、帰国後は合同参謀本部の情報将校を経て、米海軍大学院に入学して経営学で修士号を、システム解析学で博士号を取った英才である。

その後、全斗煥大統領時代に軍の武器取引事業の非効率性を指摘する報告書を出し、軍上層部から弾圧され1987年に大佐で予備役に編入されている。退官後は、三年間、米国海軍大学院で教授を務めた後、帰国して軍事分野やシステム経営に関する著作や講演に従事し有名となったが、金大中政府になり、著者が金大中を北朝鮮の総督と批判したことから弾圧を受けることとなった。その後は、弾圧に抗して韓国の共産化阻止のために活動している。

【五・十八の真実が放送される】

著者は、五・十八に北朝鮮の特殊軍が介入したという表現を2002年と2008年の二回

使った。同じ表現に対し、2002年には光州の公権力による暴力とリンチを受けて監禁されたが、2008年以降は管轄法院から連続無罪の判決を受けた。この事実はインターネットユーザーに間で大きな話題となった。二箇所の放送局で彼を招いて2013年1月から3月末まで5回にわたって放送に出演した。五・十八に北朝鮮の特殊軍六百名が侵入して内乱暴動を主導したと説明した。進行役の方々はもちろんほとんどの視聴者達が著者の説明に同感した。

【真実報道をいきなり弾圧した朴槿恵政府】

しかし、危機感を持った光州の人々は光州出身の政治家たちを動かし、朴槿恵政権を圧迫した。2013年6月10日、当時の国務総理は、国会で民主主義国家ではあり得ない発言をした。「五・十八に北朝鮮が介入しなかったというのが政府の判断である。政府の判断に反する表現は歴史歪曲であり、歴史歪曲は犯罪行為である。これに該当するインターネットの掲示物は削除など適切な措置を行う。また、北朝鮮の特殊軍の介入を報道した放送局は放通委を通じて制裁し、歴史歪曲者たちは検察で調査を行う予定だ。」

続いて大統領の直属機関である放送通信審議委員会が、・・・五・十八をテーマにして放送を進行した放送局関係者八名には重懲戒の処分を下して、今後の五・十八放送を一切中止するよう命じた。過去五年間の五・十八関連放送の内容は事実でないと宣布して放送進行者が謝罪するよう命じて、放送の出演者達は永久的に出演停止するよう独裁的な命令を出した。

【五・十八歴史の真実を明らかにする宣言文】

宣言者：大韓民国大掃除五百万野戦軍

我々大韓民国大掃除五百万は、2002年から12年間、18万ページにもものぼる捜査・裁判記録等を綿密に分析し五・十八が高潔な「民主化運動」ではなく、大韓民国を赤化させる為に北朝鮮が主導した大規模ゲリラ戦だった事実を発見した。2015年5月5日から今まで満十二ヶ月の間の先端映像分析を通じて、光州で集団で撮られた暴動の主役達の顔達426名が全て北朝鮮の核心権力層の人物だという事実を発見した。

併せて五百万野戦軍は「伝家の宝刀」として濫用されてきた五・十八関連、一九九六―一九

九七年の判決が、六つの事実誤認を犯した不良品だという事実を発見し、ここにこれを証明しようと思う。大韓民国司法部が犯したこの六つの事実誤認によって、北朝鮮が犯した戦争犯罪行為と光州の與敵行為をめぐり、呆れたことにも神聖な民主主義運動だと判決した。これは大韓民国司法部は勿論、大韓民国全ての恥辱であり恥曝した。これによって現在まで発生してきた多くの苦痛と浪費、そして大韓民国を憎悪せしめた反国家的五・十八教育が、一日も早く是正させなければならないだろう。

【韓国司法部の六つの事実誤認】

光州事件に関する裁判は、一九八〇-八一年と一九九六-九七の二回行われている。前者の裁判は、右翼判事達により構成され、後者の裁判は左翼の判事達で構成されていた。前者は、五・一八は金大中が引き起こした内乱陰謀事件だったとして判決を下し、後者は全斗煥が引き起こした内乱陰謀事件だとの判決を下した。二つの裁判は、いずれも政治裁判、理念裁判であった。全斗煥及び金永三の司令部は、それぞれ金大中、全斗煥を断罪することにばかり焦点を合わせていたため、状況日誌に記録されている資料が「五・一八は北朝鮮特殊軍六百名が主導した侵略行為だった」ことを雄弁に物語っていたが、ここに関心が無かった。韓国の司令部が六つの大変重要な事実誤認を犯した理由がここにあった。

・**事実誤認一**…世界最頂上級マクガイバー（不可能なことがない技術と能力の所有者を意味する）能力を持つ大学生が光州には、六百人もいたと事実誤認し、彼らが遂行した作戦内容が世界最頂上級特攻隊の実績よりも高いものだったのに、これを光州の大学生達が五・十七戒厳に公憤し、即興的に起こした民主化運動だと事実誤認した。

・**事実誤認二**…凄まじい戒厳令が宣布され、全ての活動家や学生達が皆、見つからないように隠れていた時に、光州にだけは万能のマクガイバー能力を持った「学生達が六百名も組織されていたと事実誤認した。

・**事実誤認三**…五月十八日午前九時頃、鞆に石を入れて大胆にも戒厳軍の集結地を訪れ、七人の空挺部隊員に負傷を負わせ、空挺部隊より更に早い速度で疾走して光州の都市の派出所を燃やし、市民達を集めて準備された工作用の流言飛語を撒いた二百五十人の素早く反応した学生

達が光州の学生だと誤認した。

事実誤認四・・・大胆にも正規師団の移動計画を探り出し待ち伏せして、棍棒を持って師団長用ジープを含む十四台のジープを奪って運転し、アジア自動車工場に直進した三百名の素早く組織されたデモ隊が、光州の学生達であると誤認した。

・**事実誤認五**・・・裁判部は、以上の六百名を光州の学生のデモだと誤認し、デモに対しては憲法守護勢力と誤認し、これを鎮圧した新軍部を国家反逆者として事実誤認した。

・**事実誤認六**・・・銃傷で死んだ百十六名の七十～七十五%に相当する人々が武器庫から奪われたカービン銃などによって死んだのだが、裁判部はこれを戒厳軍が撃ったという事実誤認した。当時戒厳軍はM十六のみ保有していた。

事実誤認の六項目について、それぞれ証拠を挙げて詳細な説明があるが、長くなるので省略する。

本の前半部には、更に北朝鮮から侵入した六百名の北朝鮮での動向調査、韓国光州侵略作戦の真相へと及んでいる。これらの内容については、筆者自身が理解不十分なところもあり、更に研究した上で、またの機会があれば紹介したい。

最後に、暴動の首謀者が北朝鮮からの進入車で会ったという証拠写真を分析した、この本の後半を校正するグラビア写真集の触りの部分を掻い摘んで紹介する。

【光州で撮影された暴動現場の顔達は全て現在の北朝鮮の高官達】

著者は、二〇〇二年から一二年の間、五・一八関連操作記録一八万ページ、北朝鮮資料、統一部資料等を研究し、三三〇〇ページにも達する八巻のドキュメンタリー歴史本を書き、二〇一四年十月「終わりに「五・十八最終報告書」という単行本を通じて結論を出した。「五・十八は北朝鮮の北朝鮮の金日成が六百名の兵力を送り国家を転覆させ赤化統一を達成するために引き起こしたゲリラ戦略であり、ここに金大中に追隨する光州の共産勢力が同調した與敵事件だった。光州には五・十八デモを指揮した人間は全くおらず、組織されたデモ隊もなかった。」

.....

著者の団体には、映像分析チームと戦略分析チームがある。かれらは一九八〇年光州で撮影さ

れた暴徒達の顔が、北朝鮮政権の核心中枢等の顔と一致している事実を発見した。某マスコミの映像データベースからは一九八〇年に光州で撮影された写真を、統一部と報道機関からは北朝鮮の主要人物情報を手に入れた。これらを対照比較した結果だった。視力を消尽させる途方もない犠牲を甘受しつつ、今までに四百三十三名の北朝鮮犯罪者達の顔を特定することができた。……光州で撮影された一枚の写真には数十名の顔があった。そして最近、金正恩と一緒に撮影された一枚の写真には四十二名の北朝鮮の将軍達の顔があった。この二枚の写真の中には二十七名の顔が重複していた。この一枚の写真だけでも北朝鮮の二十七名が光州に来て作戦を行った事実を物語っている。光州事件の功労者「我々が民主化の主役」として金銭的社会的恩恵を受けている五千七百名のうち唯一の一人も、当時の写真に出でている光州の主役ではないという事実が公衆社会に知らされた。



写真照合の一端

騒動後の追悼に集まった群衆の前列に数十人の北朝鮮工作員がいた。胸に●のついている人物。2列目以降（前の方）にも多数確認できる。中段は群衆の最前列の人物と北朝鮮高官との照合の一例

以上、『北朝鮮侵略告発状 一五・一八は北朝鮮の侵略である—光州暴動現場写真の中の四〇〇余の顔、皆、平城にいた—』の某氏による日本語訳を基にした記述であることはお断りした通りである。その内容の検証は、とても筆者の手に負えるものではないが、具体的な暴徒の動きなどを詳細に分析して証明している内容は、納得できるものであり、写真集もなるほどとうなずける内容である。

この話を持ってきた某氏は「もし韓国が赤化された場合、日本は直接大陸（中国）の脅威に晒されることになるのであり、韓国の問題は日本自身の問題である。」といった。その通りであるが、今だ東京裁判史観から脱却しきれない日本で、この話が大きく取り上げられる可能性は少ないであろう。しかし、三十年近く前に起こった光州事件は、決して歴史上の出来事だけではない。今も韓国内に潜伏している確かな脅威である。間接侵略の脅威は、わが国にも絶えず存在し、機が

熟せば武力蜂起に移行する構えを持った勢力が深く身を沈めているかもしれないことを忘れてはならない。